様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２２３０

研究課題名（和文）近代日本の語り芸ジャンルの混淆とその拡がりに関する研究ー浪花節の地方展開を軸に

研究課題名（英文）A study of extension and confusion on "Katari gei" genre: focusing on Naniwa-bushi in local area of Japan

研究代表者
薗田　郁（Sonoda, Iku）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：６０７７２２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代日本で展開した語り芸と呼ばれる芸能ジャンルの拡がりと混淆を解明するために、浪花節の人形芝居（西畑人形）、源氏節女芝居や活動人形（猿倉人形）といった語りを伴う舞台芸能を対象に現地調査を実施し、その調査で収集した資料を元に、語りから見出せる上演形式の特徴と広範で活発な興行活動の実態を明らかにした。その成果は共著書や論文として公刊し、また国際会議を含む関連学会で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で扱った芸能は、いずれも近代の都市部を離れた地方を拠点に全国的に展開したものであり、その活動実態の広がりは、これまで見過ごされてきたものの、近代日本の大衆的な語り芸が担った文化・社会的な役割や意義を具体的に考える上で欠かせないものである。したがって今回の研究成果は、近代日本の芸能文化史研究に一定の貢献をもたらすといえる。また研究成果の一部は現地調査を実施した地域への社会的な還元にも繋がると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The study aims to clarify how oral narrative genre Katari-gei was spread and mixed in modern Japan. The subject of research field conducted in several areas of Japan were performing arts with oral narrative such as Saibata Ningyo (puppetry with Naniwa-bushi), Genji-bushi Onna-shibai, Katsudo Nigyo. Based on the field of research, it revealed the features of some oral narratives in those performing arts and active live performances extensively. The results of the study were published in some articles and, in addition presented on national and international conferences.

研究分野：音楽学

キーワード：語り芸　浪花節　近代　興行　大衆芸能　地方　人形芝居　大衆

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代日本における大衆的な語り芸（とりわけ浪花節）に関する研究は、これまで主に国民国家論やメディア文化論のなかで取り上げられてきた。たとえば真鍋昌賢『浪花節 流動する語り芸』（2017）は、大衆を巻き込む柔軟で多様な語り芸としての浪花節の特性を、レコードやラジオ放送などメディア技術による全国的な拡がりや、知識人を巻き込んだ社会運動の高まりに結びつけ、その社会・文化的な役割や意義を問うというものであり、また兵藤裕巳『〈声〉の国民国家 浪花節が創る日本近代』（2000）は、そうした浪花節の役割を明示しつつ、芸能的背景として前近代の様々な語り芸ジャンルの影響を指摘してきた。これらの成果は、一方で近代における大衆的な語り芸の多様な拡がりとその重要性を明らかにしたが、他方でこの芸能ジャンル自体が浪花節の内部だけに留まらず、ジャンル全体のなかで様々な形で混淆しつつ、近代の大衆的な芸能文化を担っていたという事態については、十分に言及できていない。

この問題において注目すべき対象は、いくつかの地方で見出されるが、その実態が具体的に表れた芸能の興行活動についての研究は、守屋毅『近世芸能興行史』（1987）を端緒として、近世期の地方における芸能興行に関する成果が出されてはいるもの、近代を対象とする研究はわずかしかない。近世から近代への移行は、守屋が指摘するように、連続性が確認できる一方、社会構造の大きな変化を伴い、地方と都市の関係が大きく変わるため、地方を軸として広域的に捉える視点は、近代の大衆芸能、ならびに大衆文化の生成展開に関する研究において極めて大きな役割を担っている。語り芸ジャンルの混淆とその拡がりは、多様な興行活動を背景にすることで、地域的な特色を含みつつ日本各地に展開しており、それぞれの地域において上演形式と興行活動との結びつきを捉え、さらにそれを複数の地域に跨る広い範囲で把握することで、近代日本の大衆的な語り芸の全体像と、それが担った文化・社会的な役割や意義が明らかになると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、明治半ば以降、高知を拠点として西日本で広範囲に活動を展開した「浪花節による人形芝居：西畑人形」の上演形式および興行活動の実態を明らかにし、その上で、他地域の語り芸を伴う舞台芸能「猿倉人形（活動人形）」などとの比較を通して、近代における大衆的な語り芸ジャンルの混淆とその拡がりを包括的に明らかにすることである。具体的には、西畑人形をはじめとした舞台芸能の上演形式が様々な語り芸ジャンルとの結びつきによって形作られていること、またその結びつきに基づいて興行形態や興行内容が成り立っていることを明らかにし、その上で、浪花節の地方における展開をより広域な範囲のなかで比較考察する。この研究はこれまで大衆的な語り芸、特に浪花節という対象においてほとんど扱われてこなかった「地方」の実態を扱い、またそれを複数の地域を含めた広い範囲を対象にすることで、大衆的な語り芸の総体的な事態の把握／捉え直しすることを試みるものである。

３．研究の方法

本研究が実施した研究内容は、１）「浪花節による人形芝居：西畑人形」、および比較対象とする「猿倉人形（活動人形）」、「源氏節女芝居」の上演形式の解明、２）演者の芸能歴を通じた語り芸ジャンルの混淆の実態解明、および演者間の人的ネットワークに基づく興行活動の把握、３）各研究対象の上演形式および興行活動における地域間の比較考察である。本研究ではそのための研究方法として、まず資料収集を複数の地域での現地調査において実施し、必要な資料の収集、および聞き取り調査を行い、その上でそれらの資料を元に、上演形式と興行活動の相互的な結びつきに焦点を定めて研究を進めた。

西畑人形においては、「朝日若輝一座」に関する資料を所蔵している高知県春野町郷土資料館で調査を行い、さらに聞き取り調査を実演者および関係者数名に対して行った。猿倉人形（活動人形）については、東北および北海道地域において現地調査を行い、同様に上演資料ならびに興行活動に関する資料を収集、また聞き取り調査を実施した。猿倉人形（活動人形）の興行記録については、各地域での公共図書館において地方新聞を対象に興行記録の調査を行った。源氏節女芝居についても、主に名古屋において同様の方法で現地調査を行った。またその他音源や映像資料については、国立民族学博物館や日本伝統音楽研究センターなどを通じて資料を収集した。これらの現地調査を通じて収集した資料には、音源や映像資料、また台本資料など上演形式に関わるもの、さらに興行に関わる関係資料（興行許可書、興行日誌（演者による手紙のやりとり、舞台写真など）が含まれる。

上記の調査で収集した資料より、台本資料、映像・音源資料、および聞き取り調査を元に上演形式の具体的な内容とその特徴を検討した。また興行活動については、興行資料と聞き取り調査、さらに上演形式に関する資料を併せて検討することで、興行スケジュールだけでなく、上演形式に関わる興行の番組、興行の裏方とのやりとりなども含めた興行活動の全体像を解明することを試みた。そしてこれらの考察を踏まえ、西畑人形と猿倉人形、また源氏節について比較考察を

進め、上演形式および興行活動の相違点だけでなく、それらを含めた全体的な大衆的な語り芸の混淆とその拡がりにおける地方展開の包括的な状況を検討した。

４．研究成果

研究成果は、以下、本研究課題において調査研究の対象とした西畑人形、活動人形、源氏節女芝居それぞれに分けて述べ、それを踏まえて最後にそれらの成果を踏まえた上での全体の成果について述べたい。

①西畑人形について

西畑人形に関する音源資料や興行関係の資料、さらに演者への聞き取り調査を通じて明らかになったのは、浪花節による人形芝居の生成と展開において、浪花節と民謡や祭文といったジャンルが連続的な関係にあることである。この考察結果は西畑人形による節劇の展開として論考を発表した。論考では、人形芝居の生成過程、上演形式の特徴、興行での聴衆の在り方などを手がかりして、西畑人形で演じられた節劇による人形芝居が、都市部で広がった浪花節とは異なる形でその地域の聴衆に受け止められていたことを明らかにしている。なお本論考は国際日本文化研究センターによる大衆文化の近代班プロジェクト「浪花節の生成と展開についての学際的研究」の成果の一部として刊行されたものであり、本研究課題が関わる研究領域における研究成果となっている。

一方、複数の関係者に行った聞き取り調査では、これまでほとんど知られていなかった当該地域での浪曲師の活動が明らかになった。それぞれの浪曲師の活動が複層的に重なり、演者同士での繋がりなども含めて当地域の浪曲受容に関わっており、そのなかで節劇人形芝居が展開されていることが明らかとなった。これらの聞き取りとともに、高知ならびに愛媛県での浪花節および浪花節芝居の全体的な興行動向の調査考察を論考に纏め、高知を超えた広い活動と、それに伴う著名な浪曲師との関わりなど、新たな語り芸の展開が見出せた。浪花節芝居の興行記録に関する調査では、比較対象として九州地域についても目を向けており、浪花節と芝居の結びつきという問題を焦点にした新しい研究事業（基盤研究Ｃ　研究課題番号：21K00113）への展開に繋がっている。また音源資料については、国立民族学博物館所蔵のうち、節劇に関わるものは、土佐の民俗音楽として収集されたものであり、民俗音楽をテーマとした共同研究として新たな研究展開が生じている。

②猿倉人形（活動人形）について

本研究対象は、主に興行活動に関する調査を行い、現地調査では、人形芝居の活動拠点であった東北各地（福島、宮城、青森）や北海道のほか、国会図書館、広島や長崎での図書館等において地方新聞による興行記録の拾い出しを行った。それらの調査を通じて、戦前の地域新聞から各地の祭礼のなかに興行記録を見出すことが出来た。これまで東北地方の限られた地域や、おおまかな興行範囲しか捉えられてこなかった興行活動の具体的な活動が全国に広がっていることが明らかとなった。またその調査過程を通じて興行活動の対象を外地（朝鮮、満州、台湾）にまで広げることが出来、博覧会という新たな興行活動の形を見出すことができた。この成果は近年注目されている、植民地時代における東アジアの芸能研究にも組み込まれるものであり、調査の過程で、台湾や韓国の研究者も加わった植民地における芸能の実態を広げる国際会議での発表へつながり、さらに別の発表においては、音楽以外の新たな研究者のネットワークの広がりをもたらすきっかけとなった。

また本研究対象においても聞き取り調査を行い、活動人形の興行活動に実際に関わった人物と、当地域で興行活動を取り仕切る人物へも取材を行うことがでた。いずれからも興行活動に関する具体的な情報が得られており、興行記録と演者の活動を結びつけて興行活動の実態を解明するという、本研究課題の主要な研究目的へ繋がる成果となった。

③源氏節女芝居について

これまで源氏節女芝居に対しては、明治後期の流行を事件的な文化事象として触れることはあったものの、興行活動の全体像について言及されたことがなかったため、『近代歌舞伎年表』を基本資料として興行記録を整理しつつ、当時の新聞資料や雑誌等に掲載された源氏節女芝居の上演形態に関する内容も踏まえて、源氏節女芝居の興行活動とその在り方を明らかにした。また上演形態については、現存する源氏節女芝居の SP レコード音源のなかに、源氏節の語り芸だけでなく、複数の流行り唄、俗曲などが吹き込まれていることに着目し、それらの音源から、源氏節が関連する語り芸や周辺の芸能を取り込みつつ、一方で後に隆盛する少女歌劇の形態にも繋がる可能性があることを検討した。さらに音源資料を手がかりに源氏節の語りと女芝居の身ぶり芝居の結びつきに注目し、源氏節女芝居の流行の背景に上演形態の特徴が関わっていることを提示した。これらの成果は、それぞれ口頭報告および論考としてまとめており、一連の成果によって、上演形式と興行活動を含めた源氏節女芝居の活動実態を示すことが出来た。

④全体の成果

本研究課題はコロナ禍による外出自粛期間と重なったため、予定していた高知県での現地調

査や復元的な制作事業など実施出来なかった部分もあったが、研究期間の継続延長により、当初想定していなかった資料の収集や聞き取り調査の実施、研究者のネットワークを得ることが出来た。その結果、各地域で調査・考察を進め、本研究課題が目指していた、語り芸を軸とした興行活動の広がりとその実態を解明する、という目的は、それぞれの対象について概ね達成できたといえる。これらの地域に共通する全体像を捉えた考察も出来ており、最終的にそれらを成果として実施する見通しは得られている。なお本研究を通じて新たに生じた研究課題については、先に触れたとおり、別の研別の研究事業（基盤研究Ｃ　研究課題番号：21K00113）にも引き継がれている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 薗田郁	４．巻 17
２．論文標題 大正期から昭和初期における浪花節の地域受容ー多面化する興行ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本伝統音楽研究	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 薗田郁	４．巻 15
２．論文標題 明治中後期における源氏節の興行活動の拡がりとそのあり方―東海地方を軸に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本伝統音楽研究	６．最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 薗田郁	４．巻 43
２．論文標題 猿倉人形の立ち回りにおける「大衆化」と「民俗化」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 民俗音楽研究	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 薗田郁	４．巻 19
２．論文標題 活動人形とその担い手―横断する近代の地方芸能	５．発行年 2019年
３．雑誌名 比較日本文化研究	６．最初と最後の頁 76-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 薗田郁	４．巻 19
２．論文標題 源氏節女芝居の流行における身ぶりと語り	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本伝統音楽研究	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 薗田郁
２．発表標題 日本統治下の台湾における大衆演芸の興行―タカマチとしての博覧会―
３．学会等名 「日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築ーー現地資料に基づく基礎研究ーー」共同研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Iku SONODA
２．発表標題 Live performances in popular entertainments during the Japanese colonial period: Focusing on expositions in Taiwan, Korea, and Manchuria
３．学会等名 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea”（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Iku SONODA
２．発表標題 “The contact zone of premodern and modern styles on popular entertainment around the 1900s: Music and dance in Genji-bushi Onna-shibai “
３．学会等名 The3rd Eajs conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 薗田郁
２．発表標題 土佐の民俗音楽と西畑人形：民博所蔵の東洋学会民俗音楽調査資料の活用と意義
３．学会等名 第65回東洋音楽学会全国大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 薗田郁	４．発行年 2020年
２．出版社 せりか書房	５．総ページ数 335
３．書名 浪花節の生成と展開ー語り芸の動態史にむけて	

１．著者名 薗田郁	４．発行年 2020年
２．出版社 八王子市教育員会	５．総ページ数 372
３．書名 説経節と車人形ー明治期以降を中心に：八王子車人形調査報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関